

## 徳と絆

上田紀行(東京工業大学大学院社会理工学研究科准教授)

Noriyuki UEDA



てしまいやすい。「徳」は道德教育等をめぐって、より批判を受けてきた言葉かもしれませんが、「絆」に関しては良いものだという自明性の中に完全に組み込まれているように見えます。しかし、はたして「絆」とはそんなに手放して賞賛するほど良きものなのでしょうか。

今回の大震災の後でも、その直後から「がんばろう日本!」というキャッチフレーズが連呼されてきました。また私の住んでいる地域の商店街では、すべての街路灯に「絆」という旗が掲げられています。

しかし、私が震災後に『慈悲の怒り——震災後を生きる心のマネジメント』(朝日新聞出版)を緊急出版しなければいけないと強く思ったのは、この「がんばろう!」の洪水が1つの大きな理由でした。がんばろうと言って、何をがんばるのか。誰がどのように誰のためにがんばるのか。どんな「絆」を結ぶのか。そのことが明らかにされないままの「がんばろう!」の連呼は、判断停止の言葉であり、いま議論しておかなければいけないことから逃走し、気持ちのいい「がんばろう!」や「絆」といった言葉に逃げ込むことでしかないと思われたのです。

後世にまで莫大な負の遺産を残すこととなった原発事故、私は私たちの世代の責任を考えるだけで、大きな後悔の念に苛まれ、子どもたちや孫たちの世代に、そして福島の人々と大地に申し訳なく思う気持ちで押しつぶされそうになります。しかし、この原発事故をもたらしたのもある種の「絆」ではなかったのでしょうか。

福島の事故が起こった後でも、玄海原発の再開のための公開フォーラ

ムに九州電力が子会社等の社員を動員し、再開への前向きな意見を表明することを呼びかけていたという、いわゆる「やらせ」メール事件が発覚しました。そうしたあり方は、これまでも常態化していたもので、それゆえ事故後のこんな状況下でも前と同じように行ってしまったようです。

これもまた「絆」のひとつのあり方です。皆で力を合わせて「がんばって」事業を前に進めようという「絆」です。それはいまとなっては「徳」のある「絆」のあり方とはとても思えませんが、しかし事故の前にはどうだったのでしょうか。「そんな行動は私の信条からして許せるものではありません」と言ってフォーラムへの参加を拒否した人は、その会社の中ではむしろ他者への配慮がない人として、「人徳が足りない」とか言われていたかもしれません。

つまり一見良きもののように見える「絆」も、かなり両義的なものなのだと思います。それがどのような「絆」なのかは問われなければならないのです。

「徳」もまた両義的です。皆がその人を「徳のある人」と認識し、評価することが「徳」の要件なのだとすれば、それはその社会の人々の意識のあり方に依存することになります。そしてそうした「徳」は、その同音異義語である「得」と混同される可能性を常に深く含有していることとなります。「得」と「徳」の関係です。

それはある社会の成員に「得」をもたらす人を「徳」ある人と賞賛するといった傾向です。例えば、江戸時代に外界から途絶した山村への道

### 「絆」と「徳」ははたして良きものか

「徳」と「絆」について、いま論じることにはたいへん大きな意味があります。東日本大震災という大災害が襲い、復興は始まったばかりです。そして絆や徳はまさに私たちが悲劇に直面したとき、もっとも強く意識させられるものなのでしょう。

しかし「徳」も「絆」も論じるのにやっかいな概念です。問題なのは、徳も絆も一般に「良いもの」だと思われているということでしょう。その自明性があるので、「徳」とか「絆」と言われると、批判的精神が停止し

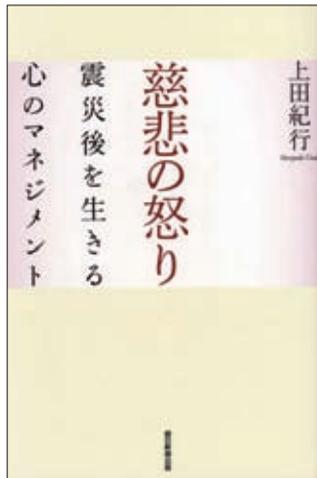
を開くべく、毎日少しづつ岩盤をのみで削り、とうとう一生かかって道を開通させた人の「徳」を皆が讃え、その道にその人の名前をつけて後世にその徳を伝えようとするのはとてもよく分かります。しかし、現代においてはどうか。誰も利用しない空港を

誘致する、自動車の走らない道を田んぼの真ん中を通す、それはもちろん一時的にその町や村を富ませ、皆に「得」を与えるでしょう。しかしそれがいったい「徳」なのか。多くの事業において、富が首長の同族企業や後援者たちに落ちていることは広く知られています。しかし、その取り分に預かりたいという人たちが、お金を持ってきた人の「徳」を至るところで讃えてきた、そのような「得=徳」の国に私たちは生きてきました。そしてその帰結の1つが今回の原発事故であったことも確かなことなのです。

「絆」と「徳」に、私たちが「良きもの」という期待を込めたいというのは分かります。しかし、そのどちらも社会の中で機能している言葉なのであり、その言葉が意味するものがそれ自体本質的に良きものであるという自明性にはまり込んでしまっただけは、私たちにとって失うものがあまりに大きいと言えるでしょう。いま必要なのは、「絆」や「徳」の批判的再構築であり、そしてそれを東日本大震災後の状況に即して考えてみたいと思うのです。

### 今ここにいない人たちに対する「絆」と「徳」とは

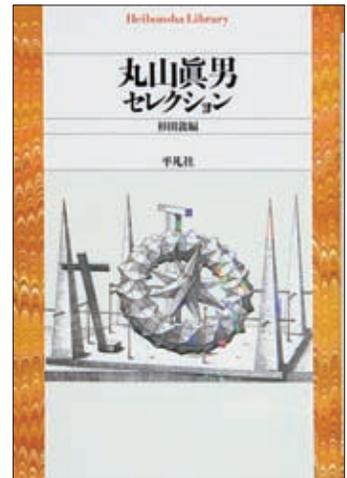
原発事故への悔恨に戻りたいと思



上田紀行『慈悲の怒り——震災後を生きる心のマネジメント』（朝日新聞出版）



猪瀬直樹『昭和16年夏の敗戦』（中公文庫）



丸山眞男『丸山眞男セレクション』（平凡社ライブラリー）

います。それは私たちの子どもたちに、そしてまだ顔を見ることさえできないような将来世代の子どもたちに、大きな負の遺産を遺してしまったという悔恨です。私たちの「絆」や「得=徳」が、他の人たちにとっては大きな負の連鎖、あるいは暴力性となって現れてしまった。ですから、絆を考えるとときには、目に見えて、ここに生きている人間同士の絆が、ここにいない人たち、ものたちに対して、何をもたらずのかについて考えないといけません。つまり、私たちが絆の中で気持ちが良いくて、幸せだという共同幻想が、「絆」や「徳」の名の下で他者を踏みつけているかもしれないと、いかにして想像の翼をのばせるのかということです。

しかし、日本人はこの共同幻想に弱い性格を持っています。日常でも「空気を読め」とか言われるように、空気が一度できてしまうと、それに対してNOがなかなか言えない。私が『慈悲の怒り』の中で論じたのも、原発の事故を起こしてしまったような構造と、300万人もの人の命を奪った第2次世界大戦に突入してしまった原因が非常に似ているということでした。

たとえば猪瀬直樹氏の『昭和16年夏の敗戦』（中公文庫）が参考になります。昭和16年夏というと、真珠

湾攻撃のほぼ半年前ですが、前年に内閣総力戦研究所という機関が作られて、各省や陸海軍、そして民間から30歳くらいの若手のバリバリのエリートたちが集められます。そして「仮に日米開戦が起こったら、どういことになるか」をテーマにシミュレーションをしました。

その結果は、最初はインドネシアに石油を取りに行き、成功する。しかしその石油をタンカーで運んでいるうちに、連合軍側にシーレーンが封鎖されて、どんどんタンカーが沈められて、本土に石油が届かずに戦局はジリ貧になりながら長期化し、最後にはソ連が不可侵条約を破って攻めてきて負ける。驚くべきことに、事実、このとおりに負けたわけです。この若者たちは、首相や軍の上層部を前にシミュレーションの結果を披露しているのですが、無視されてしまう。なぜ無視したのかというと、すでに「開戦ありき」の空気ができあがっていて、回避するわけにはいかなかったのです。福島第一原発も今から見れば、津波に対してはあれだけ危険な構造を持っていて、それが指摘されていたにもかかわらず、合理的な対応が取られることはありませんでした。

さらに丸山眞男の「軍国主義者の精神形態」（『丸山眞男セレクション』平凡社ライブラリー）。戦後の東京

裁判で開戦に導いた大臣たちが次々と尋問されますが、大臣たちは不思議な答えを連発します。例えば歴代内閣のフィクサーであった木戸幸一内大臣は、日独伊三国同盟について、賛否の態度を問われて、こう答えています。

「私個人としてはこの同盟には反対でありました」

東郷茂徳元外相も、

「私の個人的意見は反対でありましたが、すべて物事にはなり行きがあります。……前にきまった政策が一旦既成事実になった以上は、これを変えることは甚だ簡単ではありません」

小磯国昭元首相もこう言います。

「われわれ日本人の行き方として、自分の意見は意見、議論は議論といたしまして、国策がいやしくも決定せられました以上、われわれはその国策に従って努力するというのがわれわれに課せられた従来の慣習であり、また尊重せらるる行き方であります」

国策がどこかで決まって、空気が確定してしまえば、首相であろうが外相であろうが変えられない。私というものを殺してその役割に邁進するのが日本人のあり方だということです。これを聞いて、外国人の検察官や裁判官たちは、「何という無責任国家だ」と呆れてしまうのですが、この大臣たちの感覚が日本人として分かってしまうところもあるのが怖い。

東京電力の社長が避難所で土下座をしながら謝っていました。ところがすべてを失った人の前で謝罪しながら、自分は当初は給料の2分の1を確保して、3600万円をもらいながら、土下座をしていたわけです。普通の感覚では、驚くほかない強心臓ですが、一方で日本人なら、「この社長、可愛そうね」と思うところがあります。「前の社長たちは事故も起こらないで、退職金も全部もらっていったのに、たまたまこ

の時期に社長になっちゃって、ほんと、可愛そうな人だわね」と。だからちゃんと3600万円も残しておいたのでしょう。

70年前の「軍国支配者」はわれわれの中にまだ厳然として生きています。空気が確定してしまえば、みんなが自分を殺してしまって言挙げをしない。ですから日本社会では、その空気というものがはたして他者に対して暴力性を含んでいないのか、ということの検討が非常に重要になってきます。

そしてもう1つ、ここで気付かされることがあります。それは、「絆」と「徳」ということを考えるときに、われわれは、今ここにいる、見える人間のことだけを考えていていいのだろうか、今ここにいない人とか、今ここにいないものも同時に考えなければいけないのではないかということです。原発の場合は、ここに今いない将来世代の、今はまだ生まれていない子どもたちのことも考えて行動しなければいけなかったのに、今日に見えている人たちの承認を得ることを考えて突っ走ってしまった。私たちが気づくべきは、誰もが常に目に前にある、「世間」からの評価というものに引っ張られてしまって、その外にあるものが見えにくくなる構造を私たちの社会は持ち、そして私たちひとりひとりの意識がそれを支えているということです。

## 「宗教性」の再構築

「見えない存在」を感じることに、それは広い意味での「宗教性」の課題でもあります。しかし「宗教」というと多くの日本人はそれがむしろ「日本的世間」を強化するものであると思っているのではないのでしょうか。個人を家や集団に縛り付け、世間体から葬式を行う、戦死者を英霊と祀り上げるといったように。

しかし、現代日本社会の問題点へ

の鋭敏な感覚を持った宗教者たちは、明らかにその「世間」が問題なのだということを鋭く察知し、そこからの脱出と宗教性の再構築を構想しだしています。例えばダライ・ラマ14世も、私との対談の中で、日本において神道や仏教の再活性化が求められるが、その際には「リベラルな思考と行動」を獲得することが必要だと力説していました。「日本人は自分の思ったことを何も言わないし、発言や行動の責任を取りたがらないね」というのです（『ダライ・ラマとの対話』講談社文庫）。何回にも及ぶ来日で、そのことを痛感されたのでしょうか。

ダライ・ラマは外国人ですので、何を言われても所詮外からの目と思われるかもしれません。しかし、日本仏教の中心人物のひとりであることに疑いのない、浄土真宗本願寺派の第24代門主、大谷光真師もまた私との対談の中で、これまでの日本社会における絆や徳の、閉じたあり方を開いていくことを、意識的に提唱しているように思われます。

大谷師に私は真宗の儀式の最後に必ず唱和する、親鸞聖人が書かれた和讃である「恩徳讃」の意味を聞いてみました。「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も、骨をくだきても謝すべし」。「如来」とは阿弥陀如来のことであり、「師主知識」は、先輩である仏教者たちであり、それに対する「報恩感謝」への激烈なまでの決意が説かれているのですが、現実の儀式ではルーティン化され、その思いがあまり感じられません。しかし、そもそも阿弥陀さまに報ずるとはどのようなことなのでしょう。大谷師はこう答えます。

「ご恩というのは、阿弥陀様に救われて仏になる救いをいただいているということですね。それに対して報じるといっても、阿弥陀様にまったくお返しすることはできないというか、返してもしょうがない。です

からその方向を変えて、世の中に向かって自分のできることを精一杯する。第一義的には阿弥陀様に救われたという浄土真宗を、今度は周りに伝えていくことであろうと思います。必ずしもそこに留まらなくて、社会的な活動でも何でも、自分がいいと思ったことをする。自分の利益のためにではない、取引としての仕事でもないところに働きかける。私が味わっているというか、受け取っているのはそういうことです。何かを受け取ったからその人に返すという往復運動だと、横へも将来へも広がらないですよ。実際に阿弥陀様に向かって〈ありがとうございます〉というのは大事なことですし、それをおろそかにしてはいけません。そのことを〈身を粉にしても報ずべし〉だとは私には感じられない。やはり自分の心身を働かせて、この世、あるいは次の世代に働きかけるということが大切なのではないのでしょうか（『今、ここに生きる仏教』平凡社）。

### 「見えない他者」への無償の贈与としての「徳」

文化人類学や社会学の「社会的交換理論」では、交換体系には、「限定交換」と「一般交換」と2つがあるとされます。限定交換は、私があればたらその人が戻す。二者関係で、私があればたらその人が戻す、をくりかえしていく。例えばあの人からお野菜をもらったから魚を返さないと、ということが続いていきます。一般交換というのは、私が誰かに物をあげたとして、その人からは私に直接は返ってこないのですが、私の贈与したものがあちこちを巡って、いつか私に返ってくる。これらの交換体系はモースの『贈与論』やレヴィ＝ストロースの『親族の基本体系』などで研究されてきました。

そこでは限定交換よりも一般交換のほうが社会の信頼性と安定性は高

いと言われていてます。この人にこれだけもらったら、この人にこれだけ返すというのは、その二者間の信頼関係の話です。ところがこの人にあげた

ら、これが巡り巡っていつか返ってくると思えるのは、社会に対する信頼感がないとできません。つまり、この人にあげるときは、まわりの社会の利他性のシステムに委ねて、無償で贈与するわけです。さらに時間軸も関係してきます。もしかしたら返ってくるのは私の代ではないかもしれない。だから私はそこで「損」をするかもしれない、しかし未来への贈与を喜んで行うということです。

この大谷師の発言は、「南無阿弥陀仏」がえてして阿弥陀さまとの限定交換になってしまっていて、世界がそこで閉じてしまっていることを鋭く指摘しています。阿弥陀さまへの「報恩」とは、阿弥陀さまに感謝し、それを一心に信ずるといった二者間関係を指すのではなく、阿弥陀さまから贈与された恵みを、社会へ未来へと振り向けていくというダイナミックな社会的行為なのであり、そのことに「身を粉にしても」コミットするという決意だということです。

これは浄土真宗に限らず、現代の宗教が陥りがちな、自己の「得」を目指す信仰となりがちな問題の指摘であるとともに、宗教の分野だけではなく、私たちのすべての行為が、獲得した「得」に対して「得」をもって返すという、「徳」なき交換となっていることへの強烈な批判になっています。経済的利益を与えてくれることを期待して政治家に票を



上田紀行『ダライ・ラマとの対話』  
(講談社文庫)



大谷光真・上田紀行『今、ここに生きる仏教』(平凡社)

入れるといった行為からは、「徳」は生まれ得ないのです。

「徳」は「得」ではありません。見える他者との「得」の利害関係ではなく、「見えない他者」へ無償で贈与すること、幸せを祈ること、そのために行動することが「徳」なのです。しかし「見える世界」だけを見ている私たちにはその「徳」の世界が見えない。そこで、「見えない」阿弥陀如来からの贈与を感じ、そのことに感謝し、報じる決意を持つ中で、「見えない」人たち、ものたちとの「絆」を結んでいる私を認識し、その中で私たちは「徳」ある行動を取れるようになるということです。

これは阿弥陀如来に限らず、大日如来にせよ、観音菩薩にせよ、「見えないもの」からの力をいただき、それを「まだ見ぬ者たち」への「徳」ある行動に振り向けるという、様々な宗教に共通した構造のように思えます。限定交換としての「得」ではなく、一般交換としての「徳」の宗教性こそが、現代に求められているものだといえるでしょう。そしてそれは宗教のみならず、私たちの社会が今こそ見直さなければならない、「絆」と「徳」のあり方なのです。

悔恨から未来へ。私たちの行動がいま問われています。